



88110151



International Baccalaureate®  
Baccalauréat International  
Bachillerato Internacional

**JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1**  
**JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1**  
**JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1**

Wednesday 9 November 2011 (morning)  
Mercredi 9 novembre 2011 (matin)  
Miércoles de noviembre de 2011 (mañana)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

---

**INSTRUCTIONS TO CANDIDATES**

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

**INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS**

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

**INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS**

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

次の 1 の文章と 2 の詩のうち、どちらか一つを選んでコメンタリー（解説文）を書きなさい。

# 1.

シルクロードを西に向か<sup>むか</sup>って歩いている時のことだった。中近東のどこかの町ですれちがった日本人に、一冊の文庫本を貰<sup>もら</sup>った。何百日も故国を離れ、異国をほつつき歩いている者にとって、母国語の書物はひとつの宝石である。少なくとも私は、食物より日本の書物を恋しく思うようになっていた。話されるものであれ、書かれたものであれ、日本語への飢<sup>も</sup>餓感<sup>が</sup>は常に満たされるこ<sup>こ</sup>とがなかった。砂漠を走るバスの中で、風景に眼をやりながら、ひとりでブツブツ日本語を呟<sup>つぶ</sup>いている自分に気がついて、ドキッとすることもあった。稀にシルクロードを東に下<sup>くだ</sup>ってくる日本人に行き会<sup>あ</sup>うと、しばらくは日本語で言葉をかわし、別れ際に持ち合わせている日本語の本を交換するのが常だった。すでに読み終え、ただの石ころに化してしまった荷物としての書物を、相手の宝石のような書物と交換するわけだ。もちろん、事情は相手にとっても変わらない。私の石<sup>いし</sup>は相手の宝石になるはずだった。それから読み終わるまでの何日かは、心が弾むような刻<sup>とき</sup>が持てることになる。事実、そのようにして松本清張や司馬遼太郎の一冊の本が、シルクロードを何十回となく往<sup>い</sup>ったり来<sup>き</sup>たりしているのだった。

その時、私が相手<sup>あ</sup>に何を渡したのかは記憶にないが、貰<sup>もら</sup>ったのは『さぶ』だった。文庫本用のカバーはすでになく、剥き出しにされた表紙にはくつきりと手垢がついていた。少なくとも二<sup>ふた</sup>人の手は経<sup>へ</sup>てきているに違いないと思わせるような貫<sup>くわん</sup>禄がついていた。相手と別れ、街道沿いのチャイナで紅茶をすすりながら、私は山本周五郎をひるげた。ところが一行目の活字を眼で追っているうちに、なぜか急に胸が熱くなってしまったのだ。

たとえば『さぶ』の後半部で描かれる、無私の献身をつづけるさぶの、栄二へのたった一度の爆発といったシーンに心を揺さぶられたというなら、自分でも納得できる。照れ臭いかもしれな<sup>い</sup>が狼狽<sup>もや</sup>はしないだろう。ところが、私は一行目で駄目になってしまったのだ。

《小雨が靄<sup>もや</sup>のようにけふる夕方、両国橋を西から東へ、さぶが泣きながら渡っていた》

駄目になった理由が分からなかった。さぶを追ってきた栄二が登場すると、さらに激しく感情を揺さぶられることになった。

《「帰るんだ」と栄二<sup>えいじ</sup>がいった、「聞こえねえのか」

「いやだ、おら葛西<sup>かさい</sup>へ帰る」とさぶ<sup>さぶ</sup>がいった、「おかみさんに出ていけつていわれたんだ、もう三度めなんだ」

「あるきな」といって栄二は左のほうへ顎<sup>あご</sup>をしゃくつた、「人が見るから」》

しかし、ここに至っても、まだ一ページ目が終わるか終わらないかという部分でしかないのだ。  
私は訳がわからないままに、しばらく本をテーブルの上に伏せた。その先を読み進むことができ  
30 なかった。

(沢木耕太郎「書物の漂流 オンザロードⅠ」  
『地図を燃やす 路上の視野Ⅲ』一九八二年)

(注)

松本清張 一九〇九～一九九二年 小説家。特に推理小説が有名。

司馬遼太郎 一九二三～一九九六年 歴史小説家。エッセイスト。

チャイナ 中央アジア一帯にある茶店。

山本周五郎 一九〇三～一九六七年 小説家。『さぶ』は一九六三年に書かれた時代小説。

- ー 「シルクロード」という場所は、文章にどのような効果を与えていますか。
- ー 『さぶ』が「私」に与えた影響を、作者はどのように表現していますか。
- ー この文章の構成の特色について解説しなさい。
- ー 作者はこの文章を通して、何を表現しようとしていますか。

2.

アゼリア

かつて

いともだちわたしは ブランコにのりたまふ

杉の梢<sup>りすぎ</sup>のとがった枝から

空に吸いこまれた

5 すべり台の傾斜におされては

幼いともだちの歓声<sup>かんせい</sup>をくぐりぬけて

母の腕<sup>かみで</sup>く吸いこまれた

今日

石<sup>いし</sup>をしきつめた坂道にのぞんでひろがる庭園の

10 漏斗<sup>ろうど</sup>状にひらいたアゼリアに

わたしはもう吸いこまれぬ

ブランコやすべり台はわたしの背中から遠く

小さくなってしまった

わたしはもう吸いこまれぬ

15 けれど

わたしのなかの见えないものが

见えない風に揺れ 见えない傾斜をすべって

漏斗の芯<sup>こ</sup>くとおちてゆき

わたしのなかに

20 空の遠さ<sup>かいうさ</sup>でもない

母の腕の親しさ<sup>かみで</sup>でもない

漏斗のむこうの见えない部屋の

灰暗<sup>はいあん</sup>いあかるさがひろがった

(吉田加南子 「アゼリア」 『仕事』 一九八二年)

(注)

漏斗 形状が朝顔の花の形に似た器具。

アゼリア ツツジ科の植物。漏斗状の大きな花が咲く。

- － アゼリアのイメージはどのような役割を果たしていますか。
  - － 「わたし」は過去をどのようなものとして捉えていますか。
  - － この詩における視覚的效果について解説しなさい。
  - － この詩の構成の特色について解説しなさい。
-